

講演

## アイルランドの歴史と政治

波多野 裕 造

〔以下は、白鷗大学ビジネス開発研究所主催の下で、平成9年7月16日に行われた講演の要旨である。「白鷗法学」に掲載することを快諾していただいた波多野教授をはじめ、関係諸氏に謝意を表する次第である。(編集委員会)〕

- 1 はじめに
- 2 アイルランドの政党と最近の総選挙の結果
- 3 アイルランドの選挙制度
- 4 二大政党の歴史的経緯

## 1 はじめに

本日はアイルランドの歴史と政治についてお話をさせていただくことになっておりますが、このところイギリスとフランスで相次いで選挙があり、イギリスでは政権交代、フランスでは保守、革新のコアピタシオン（共存、もとは男女の「同棲」の意）という現象が起きました。

アイルランドでも、6月に選挙があり、つい最近政権が変わってアハーン首相の内閣が誕生しました。新しい議会の各党議席数は、お手元のレジュメの通りで、第一党の共和党も過半数には達していませんので、前内閣のカラーフルな“虹の連立”（Rainbow Coalition）ほどではありませんが、やはり他党（進歩民主党）との連立内閣です。

### ◇ 1997年アイルランド総選挙スケジュール

- 5月13日 下院解散閣議決定
  - 15日 下院解散 ブルードン首相第27回議会の解散を宣言  
これを受けてロビンソン大統領下院解散を決定
  - 6月6日(金) 下院総選挙
  - 7日 開票始まる
  - 6月26日(木) 下院議会召集 新首班指名投票 新内閣成立
- アハーン内閣は共和党14名、進歩民主党1名の閣僚で構成される連立内閣である。

政党名	議席数	得票率
○共和党(Fianna Fáil)	77(68)	39.3 (39.1)
*統一アイルランド党(Fine Gael)	54(46)	27.9 (24.5)
*労働党(Labour)	17(32)	10.4 (19.3)
○進歩民主党(The Progressive Democrats)	4(8)	4.7 (4.7)
*民主左翼党(Democratic Left)	4(6)	2.5 (3.5)
緑の党(Green Party)	2(1)	2.8 (1.4)
シンフェイン党(Sinn Féin)	1(0)	2.5 (1.6)
その他	7(5)	9.8 (6.0)
	166(166)	

(注)

- 1 括弧内は解散時の議席数。得票率はRTE (当国営テレビ) によるもの。
- 2 中選挙区優先順位付比例代表制による投票 (任期5年)。
- 3 平均投票率は66.8% (推定)。前回(1992年)は68%。
- 4 ○印は連立与党、\*印は解散前の「虹の連立」

政党については後ほど歴史的な経緯とともに説明したいと思いますが、その前にアイルランドという国の特殊な事情について少しお話ししたいと思います。

まずアイルランドの言葉ですが、本来は、アイルランド語というのがあったんですね。ゲリックまたはゲール語といいます。これはケルト語から派生した言葉で、英語とは全く違う。実は12世紀以来、イギリスに支配されて800年に及ぶ支配だと彼らは言うんですが、その間に、自分の言葉を失ってしまう。そして英語を自分達の言葉とせざるを得なかった。例えば、韓国の状況を考えると分かると思うんです。もし日本の韓国、朝鮮支配が百年二百年と続いていたら、朝鮮語はおそらく消えてしまって、日本語になっていただろうと思われれます。それとちょっと似たような状況がアイルランドにあり

まして、現在アイルランドで日常話されている言葉は、もちろん英語です。ところが1922年にイギリスの支配を脱して、アイルランドが自由国というステータスを持ってからは、ゲーリックを復活させたいと、学校でも一生懸命教えたりしているんですが、実際はゲーリックを話せる人はごく一握りしかいません。大体人口は、今350万人くらいありますが、そのうちの5%以下ではないかといわれています。そういうことで、英語が日常の言葉であり、それから公用語もゲーリックが第一公用語なんですが、英語も第二公用語として、公認されているという状況なのです。

今言いましたように、アイルランド共和国では、ゲーリックを非常に奨励して、それを第一公用語にしているくらいですから、公の地位にある人などは、全部ゲーリックでよばれています。例えば、総理大臣のことは、プライム・ミニスター(Prime Minister)ではなくて、ティーショック(Taoiseach=首領)、それから大統領(President)のことはオクタロン・ナ・ヘレン(Uachtarán na hÉireann)といいます。私は、実は、1990年から3年ばかり、アイルランドに在勤しておりましたが、着任したすぐその日だったか翌日だったかにパーティがありまして、呼ばれて行って、閣僚のテーブルに案内されて座ったわけです。横に労働大臣かなんかがいまして、いろんな話をしていたんですが、彼がさかんにティーショックがどうしたこうしたと、ティーショックという語を連発するのです。私は、ティーショックって何だろうと全然分からなかったわけです。まあ、これは非常にうかつな話ですが、それが、Prime Minister、つまり首相のことだったんですね。ことほど左様に彼らはアイリッシュ・ナショナリズムを鼓舞するために、ゲーリックの使用を奨励しているわけです。だけれども、実際にはなかなか、指導者達の思うようにはいかず、やっぱり、英語で全部用が足せてしまうために、わざわざ、ゲーリックを日常語として使うということはなかなか進まないのが実状です。

因みに、英語とアイルランド語というのは全く別の言語なんですが、人の名前なんかは近いですね、例えば、ショーン・コネリーという俳優がいます。が、ショーンというのは、Sean と書きます。あれは英語でいうと、ジョン

(John) なんです。それから、こんどノーベル文学賞をもらった、シェイマス・ヒーニー、あれはジェイムズ(James)なんですね。ジェイムズがシェイマス(Seamus)になったんです。それから、パトリック(Patrick)は、ポーリック(Pádraic)になります。そういうふうに、ある意味では非常に近い関係にあるということと言えるわけです。

## 2 アイルランドの政党と最近の総選挙の結果

さて、アイルランドの政治ですが、まず議会の話から始めたいと思います。時間も限られておりますので、ちょっと、はしょってお話しせざるを得ないと思いますが、まず、議会の下院は、議席総数が、166です。その内の第一党であるFianna Fáil (共和党)、このフィアナ・フォイルというのもゲーリックでありまして、これは英語に訳しますと、Soldiers of Destiny つまり運命の兵士という意味です。ただ、日本語ではどういうわけか、共和党と訳しています。それから第二党の「統一アイルランド党」というのも、これは党名がFine Gael というのですが、このフィネ・ゲイルというのは、英語では Family of the Irish、アイルランド人のファミリーということです。この両党とも、歴史的な経緯がありまして、それについて今日、お話ししたいと思います。そのほかの政党としては、労働党(Labour Party)、それから、Fianna Fáil から分かれた進歩民主党(Progressive Democrats)というのがあります。今回共和党と連立を組んだのはこの党です。それから、Democratic Left、すなわち民主左翼党。それから、これはヨーロッパには、どこの国にもあるんですが、Green Party、つまり、緑の党、それからIRA (アイルランド共和軍)の政治部とでもいいでしょうか、IRAが基盤になっている政党、それがシン・フェイン党という政党です。そういう小さな党を全部合わせますと、10ばかりの政党や政治グループがありますけれども、そのうちの第一党である共和党、第二党である統一アイルランド党が常に中核になって、それだけでは過半数に足りないんで、他の小さな党と政策協定などをして連立政権をつくっているというのが実状です。

アイルランドといえば、すぐIRAのテロ活動、それから北アイルランド問題を思い浮かべます。日本人には、なかなか理解しにくいのは、日本人というのはあまり宗教心ありませんし、それから、ナショナリズムなんていってもピンとこないわけですから、北アイルランド問題を理解するのは、現代の日本人にとっては、むずかしいのですが、一口に言って、北アイルランド問題というのは、宗教戦争といますか、宗教問題だという人がおります。確かにそういう面もありますが、必ずしもそれだけで全部割り切れるわけではない。宗教紛争、すなわちカトリックとプロテスタントとの争いというわけですが、それだけではない。そんな単純なものではありません。そこに民族主義、ナショナリズムが絡んできているわけです。われわれがみると、アイルランド人もイギリス人もなかなか区別がつかないのですが、アイルランド人にうっかり Are you English? などと聞こうものなら、No, I'm Irish. と奮然として言い返されます。アイルランド人にとっては、イングリッシュに間違えられたくないという意識が非常に強いのです。その辺を、アイルランドにもし行かれることがあれば、気を付ける必要があるというふうに思います。

ところで、表の丸印がついているのが、今度の連立内閣、つまり、共和党と進歩民主党、これが一緒になりました。それでも81議席にしかなりません。そこで、それプラス、シン・フェイン党、IRAの政治部ですよ、それからその他と書いてありますが、無所属から3人、それで、やっと85名を確保して首班指名を受けたというわけです。ですからまあ、多数党といっても絶対多数ではありませんので、なかなか政局が安定するかどうかですが、これまで選挙前まで政権を担当しておりました Fine Gael に比べますと、今度政権についた Fianna Fail の方が、実は、IRAに同情的と言いますか、IRAに対する理解があるということで、北アイルランド問題に何らかの新しい進展が見られるかもしれないという期待が持たれているわけです。それから、第一党である共和党、第二党である統一アイルランド党、この二つの党は、両方とも現在では保守党というふうにいわれておりますが、実はもともとこれは革命党だったわけです。イギリスの支配から脱する闘争のときに主役を演

じたのが、この二つの政党(はじめは一つ)であり、その軍事部門が Irish Republican Army すなわち IRAであったわけです。ところが、目的である独立が達成された後は、保守党に変わってしまった。これはまあ、どこの国にでもあるわけです。アメリカの独立戦争のときだって、あれはアメリカの革命なんだけれども、主役を演じた勢力も終わってしまえば保守党になってしまったといった具合にですね。

### 3 アイルランドの選挙制度

それで、私が特に今日お話したかったのは、選挙制度についてです。これは、日本もひとつ参考にしたら良いのではないかと思うからです。日本の場合、ついこの前の選挙では、小選挙区比例代表制の並立制という方法を使った選挙で、実は、小選挙区で落選した人が比例代表の方で復活するというような有権者が納得のできないような現象が多々起こりました。それで、いままた元の中選挙区制の方が良いのではないかという声が出ているわけですが、このアイルランドの選挙方法というのは非常に面白い。Proportional Representation by Means of a Single Transferable Vote in Multi-Member Constituencies というんですが、余り長いので、簡単に、PR-STV といっております。これを日本語に直しますと、単一移譲票による中選挙区比例代表制とでもいうんでしょうか。海外で勤務している、例えば国防軍の将兵だとか、公務員の家族なんかも郵便で投票ができることになっております。この選挙の仕組みはということかといいますと、投票用紙には、その選挙区の候補者全員の名前が印刷されているわけです。それで有権者は、投票所に行きましたら、例えば、A・B・C・D・Eという候補がいるとしますね、それで自分はC候補を支持しているという人は、Cに1と書く。そしてその次に支持するのが、例えばE候補だったとすると、これに2と書くわけです。もしもそれ以上支持する人がなければこれで投票したらよい。また、全部に順位をつけてもかまわない。そういう方法になっています。それじゃあ、どうやって当選者を決定するかといいますと、このように番号

をつけてですね、transferable ですから票を transfer できるわけです。つまり、このC候補が、当選に必要な票数を既に獲得した場合には、この票はE候補に流れるんです。transfer できるわけです。それから、例えばC候補が全く当選の可能性がない場合には、2の順位の人、つまりE候補に、この票が行くということになって、ほとんど死票が出ないんですね。これが極めてユニークなアイルランドの選挙制度です。日本もこれを見習ったら良いんじゃないかと思うんですが、ただ、なぜアイルランドでできるかという、やっぱり人口が少ない国ですから、それができるのかも知れません。どういうふうにして算定するかといいますと、有効投票総数というものをですね、例えば、4万票が有効投票総数だとします。それで議席数が、例えば4だとします。そうすると、4プラス1、これでもって、4万票を割るわけです。そうして、割ったものにさらに1を足す。そうすると、8,001票—これが当選に必要な票数ということになります。つまり、8,001票を獲得すれば当選するんです。また、全く当選する見込みのないような場合はですね、これは、失格(disqualify)とされますから、2位の方に票が行くと、こういう仕組みになっているんです。そして、結局、残った候補者の数と、残った議席数とが一致したとき、残った候補者は全員当選するということになります。そういう、ちょっと複雑なようにはみえるんですが、極めて合理的なやり方をやっているんですね。

ただ、上院の場合はちょっと違ってまして、上院は、議席総数が60議席ですが、下院の方がもちろん権限が大きいわけです。で、上院の60というのは、そのうちの11議席は、首相が選べるんです。残りの49ですが、この49のうちの6人は大学が選ぶんです。あとの43というのは、各職能別に選出されてきます。昔、日本でも参議院をそのようにしたら良いんじゃないかという議論もあったことはあったんですが、そういう意味で、広くあらゆる階層からの有識者たちを選出できる仕組みになっているわけです。ちょっと急いでお話したんですが、まあ、現在のアイルランドの選挙の仕組みというのは、簡単にいえばそういうことなんです。



#### 4 二大政党の歴史的経緯

こうして、実際にアイルランドの政治を動かしているのは、さっき言いましたように、共和党と統一アイルランド党、この2大保守党なんですね。そこで、この2大保守党の源流といいますか、実はそれをお話したいと思っているわけです。アイルランド問題というのは、さっきちょっと言いましたが、12世紀にイギリスのヘンリー2世がアイルランドに初めて行きまして、アイルランドを平定したんですね。それ以来、この国はイギリスの宗主権の下にあった。アイルランド人にいわせると、イギリスのいわば、植民地であると、こういうわけですね。まあ、実際には、そんな植民地というほどでもない期間もあったのですが、アイルランドは、もともとケルト人が早くから住みついていた島であって、おのずからイギリスとは文化も歴史も違うわけです。それからイギリスも、実は Great Britain—大ブリテン島はわれわれから見ると全部同じように見えますが、北の方はスコットランドですね、それから、南の方はイングランドで、西の方はウェールズで、彼らは全部、人種が違うんですよ。少なくとも彼らはそう思っている。ですから、今でも“国際試合”を、彼らの間でやるわけです。スコットランド対イングランド、それからウェールズ対スコットランドというような調子で。お互い外国だと思っているわけです。実際、イギリスの正式国名は、United Kingdom (連合王国)。これは、略してUKといいます。だけれども日本で、私は今度連合王国へ赴任するんだということ、連合王国ってどこ？ということまでどこだか分からない。ともかく、「グレート・ブリテン及び北アイルランド連合王国」The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland—これがイギリスの正式の国名です。あくまでも連合王国であって、日本のように非常に均質な単一国家ではないということです。それから、イギリスは、やっぱり British Empire といわれたかつての大英帝国、その植民地、彼らが支配した国からやってきた人たちが大勢住んでいます。これはインド、パキスタン、マレーシアなど、アジアを含めてですね。第2次大戦後、そういう国々は独立しましたがけれども、彼らはかつては British Subjects、つまりイギリス国王の臣民だったわけで、

そういう人たちがイギリスにきておりますから、イギリスは今や、完全な多民族国家(multiracial nation)になっているわけですね。ですから、われわれ、そういうところの理解があまり十分ではないと思いますが、とにかく、アイルランドに話を戻しますと、アイルランド人とイギリス人とは人種が違うんだというふうに、彼らは思っているんだということを強調したい。なぜそういうふうに、彼らは言うかといいますと、ケルトとアングロ・サクソンという人種の違いだけではなく、まず宗教も違うんですね。アイルランドの大体95%はカトリックなんです。それに対して、イギリスは、一応Church of England、英国国教といっておりますが、これは、実は儀式とかはほとんど変わらないくらい、限りなくカトリックに近いんですが、ご存知の通り、ヘンリー8世が離婚問題でローマ法王と喧嘩して、法王から破門されて、それなら俺は自分で教会を作るといつてつくれたのが、Church of Englandですね。まあ、いわばヘンリー8世のわがままからできたようなものなのですが、それがやっぱりプロテスタントといいますか、新教扱いになって、そのために、実は宗教の中にも階級ができてしまったんですよ、イギリスやアイルランドにおいては。北アイルランドでは今でもそうだし、独立前のアイルランドでは、一番社会の上層部にくるのが、今いいました英国国教徒、Anglican Churchといいますか、Church of England ですね。この人たち、これが一番偉い最上層部なんです。その次に来るのが、プロテスタントだけれども、Non-Conformist (非国教徒) といって、これは、英国国教信者ではないが、新教徒です。それで最下位に位置づけられているのが、カトリックなんですね。そういう社会的な階層がありまして、プロテスタントからみれば、カトリックというのは、下層の人間、自分たちよりも劣った、馬鹿で無教養な、しかも貧乏人だと、こうなっているわけです。そういう支配と被支配の関係というのが、さっきいいましたように、大ざっぱに言えば、800年近く続いた。まあ実際には700年位ですか、その間に非常にイギリスの支配が厳しかった時代もあり、また緩やかだった時代もあるんですが、一番厳しかったのが、実は、オリバー・クロムウェル(Oliver Cromwell)の時代(17世紀中葉)。クロ

ムウェルはチャールズ1世という国王を裁判にかけて処刑してしまった人ですが、日本では清廉な武断政治家で非常に立派な人だとされ、英傑のように言われております。しかしアイルランドでは蛇蝎か悪魔のように嫌われています。これはもうアイルランド人を一番いじめたひどい奴だということになっているわけです。だから場所が変わると、人間の評価もこうも違うものかと思いました。

それから、もう一つ言っておかなきゃならないのは、それじゃカトリックは全部ケルトかというところでもない。アイルランド人というのは、全部カトリックかというところでもない。その辺が非常に難しいところですね。何と言っても、隣に大ブリテン島があって、イングランドがあって、そこからたくさんの人が来ているし、スコットランドやウェールズからだって来る。実際には混ざっているんですね。それで、実ははっきりとしたイングリッシュが、アイルランドにきて、何世紀かを生きるうちにアイルランド人になったケースもあります。アイルランド化されたといいますか、Anglo-Irish という言葉がありますが、イギリス系アイルランド人とでもいうんでしょう。アメリカ人の中に Irish-American (アイルランド系アメリカ人) という人たちがおり、ケネディ大統領もその一人だったのですが、アイルランドには、Anglo-Irish、つまり、イギリス系アイルランド人というのがいるんですね。そういう人たちは、血統的にはイギリス人であっても、意識はアイルランド人になってくる。そして、アイルランドに対するイギリスの支配を非常に憤って、アイルランド独立に手を貸した人たち、そういう人たちがイギリス系にもずいぶんいるんです。そういうことを見過ごして、ただイギリス人とアイルランド人との戦いだとか、アングロサクソンとケルトの争いだとか、さっき言いましたように、プロテスタントとカトリックとの対立だというふうに単純化すると、実は間違いなんですね。そういうことを言いたかったわけです。しかし、大ざっぱに言えば、やはりカトリックは常にプロテスタントに抑圧されてきたし、しかも、カトリックというのは、ケルト系のアイルランド人が非常に多かったということで、支配・被支配の関係からアイルランド人の間にナショ

ナリズムが生まれてくるのは、これは当然のことだといえましょう。それで、カトリック教徒に対するそういう差別政策に抗議して、1798年に初めて組織的な反乱がアイルランドで起こった。200年位前のことです。この時に反乱の中心になったのは、United Irishmen という団体、結社なんです、これはイギリス政府によって鎮圧されました。ところが、この争乱はさっきいきましたように、アイルランド人がイギリスからの分離独立を目指して起こした最初の組織的な反抗であったわけです。それよりちょっと前、すなわち1776年のアメリカの独立というものが、精神的に及ぼした影響というのは非常に大きかっただろうと推測されます。それから1789年には、ご存知のようにフランス大革命が起こりましたね。「自由・平等・博愛」とか「人権」といった思想が人々を動かす時代になった。それがアイルランド人に、われわれも、という気を起こさせたわけです。それから、アイルランドでは、カトリックだけでなく、プロテスタントも自治を求めたわけですね。だからアイルランドの中のカトリックは二重支配を受けていたようなものでした。イギリスからの支配を受けていたけれども、アイルランドの中では、やはり、アイリッシュ・プロテスタントからも抑圧されていた。二重三重の圧制を受けてきた。でもまあ、United Irishmenのようにアイリッシュという点では、プロテスタントもカトリックも一緒になって、イギリスに対して、イギリスからの独立を要求した時代もあったわけです。自由と平等を旗印にして1789年に起こったフランス大革命は、アメリカの独立にもまして、アイルランド人に強烈な影響を与えた。アイルランド人の自由と平等を実現するための改革を求める運動が、これから起こって行くわけですが、この時期の改革の指導者は実はカトリックじゃないんです。北アイルランド出身の Presbyterian、長老派と日本では訳しておりますね、この人たちであった。ウォルフ・トーン(Wolfe Tone)とか、エドワード・フィッツジェラルド(Edward FitzGerald)なんていう人たちで、ウォルフ・トーンは、後にフランスと結託して、イギリスに反抗したというんで、捕らえられて、裁判にかけられたあげく、彼は自決するんですけども、まあそういう人がいたわけです。当時イギリスとフラン

スは常にライバル関係にあったわけですし、北アメリカの西海岸の帰属をめぐる、イギリスとスペインが対立したときなんかは、アイルランドは圧倒的にカトリックが多いわけですから、一体イギリスとスペインのどちらにつくかで大いに国論が割れたんです。それから、1793年にフランスで国王ルイ16世が処刑されます。ルイ16世を処刑したフランスが、イギリスに宣戦布告してきたんですね。こういった非常事態に直面したイギリスは、どうしてもアイルランド人の協力を必要としたために、まあこれも現金な話なんですけど、それまでは全くカトリックには認めていなかった選挙権を急速認めるとか、カトリックだけに適用されていた刑法、こんなものがあったんですよ。無茶な話なんですけど、そういったカトリックに対する規制を緩和したのですね。それから、それまでは、議員だとか、高級官僚だとか裁判官などは、アイルランド人はなれなかったんだけど、そういう道も徐々に開いていくということが起こりました。実際に、アイルランドの独立が実現するのはもう少し先の話なのですが、イギリスにウィリアム・ピット(William Pitt)という首相がおりました。ピットという政治家は二人おりましてこれは親子で同じウィリアム・ピットですが、息子の小ピットの方です。この人がアイルランド問題を根本的に解決するのを感じて、18世紀の終わり頃、正確には1800年に連合法という法律をつくります。Act of Union というのですが、これでアイルランドとイギリスは、一つの国になったんです。いわば吸収合併です。ちょうどナチ・ドイツがオーストリアをアンシュルス(Anschluss)とって併合したように、アイルランドを吸収合併してしまったわけです。これでアイルランドは、その当時としては、世界中に広がる大英帝国の一部になったわけだから、アイルランドにとっても多少メリットがないわけではなかったんですが、しかし逆に言うと、それがアイルランド人の中のナショナリズムを一層刺激することにもなったんです。

これについては詳しく話すといくらでも話せるんですが、19世紀の半ば、つまり1846年から48年にかけて3カ年、ジャガイモに立ち枯れ病という病害が発生しまして、アイルランドで大飢饉が起こるんですね。その時のイギリ

ス政府の対応が非常にまずかった。大体人口の3分の1が死んで、3分の1が外国に移住して、人口がいったんに3分の1に減ってしまった。アイルランドに残った人口が3分の1に減ったという時代があったんですね。ケネディ大統領の祖先なんかも、そのころアメリカに移住したといわれています。そういうことから、実は19世紀の半ば頃、1858年にですが、IRBという秘密結社、これは Irish Republican Brothers、アイルランド共和友愛会、あるいは兄弟会とかいろいろに訳されていますが、どういう団体かといえますと、武力闘争によってでも、アイルランドの分離独立を目指すという人たちで、アイルランドの首都ダブリンとアメリカのニューヨークに本部を置いています。なぜニューヨークに本部を置いたかといえますと、Irish Americans、要するにアイルランド人でアメリカに移住した人たちがアイルランドの独立支援をやったということです。IRBは、アイルランドの独立は、平和的手段ではとても達成できない。だから武力闘争を目指すということでした。IRAとIRBはAとBの違いだけですが、実は、最近まで活動していたIRAはIRBの流れを汲むグループです。ともかく、このIRBは、アメリカから資金や武器を提供して、武力闘争によってでも目標を達成しようという連中でした。アイルランドは古い国ですから、大体5,000年くらいの歴史を持っている国ですから、いろんな民話だとか伝説があります。そのアイルランドの伝説の中に、フェニアン(Fenian)という人たちがいました。これは非常に勇猛な武士団でした。その古代伝説を復活させてIRBの会員は、フェニアンズ(Fenians)と呼ばれたわけです。ただそういう武力闘争によって目的を達成しようとするグループがある反面、あくまでも平和的な手段によって目的を達成すべきだという人たちもいたんです。そういう人たちは、Home Rulers と呼ばれたわけですが、自治論者ともいうんでしょうか。19世紀の全般を通じて、武力闘争か合法的手段による自治獲得かというこの二つの流れがずっと続くわけです。ところが、両者に共通していることは、Irish Identity。つまり、自分達の文化的な、何と言いますか、自己確認といえますか、我々はイングリッシュじゃないんだという意識、これは共通しているんですね。そして、

ウィリアム・バトラー・イェーツ(William Butler Yeats)なんていう詩人がおられますね、彼なんかもアイルランドの文芸復興運動を通じて、アイルランドのナショナリズムを大いに鼓吹するわけです。それからそういう文芸復興運動以外にも、Gaelic Athletic Association、ゲール体育協会とかですね、Gaelic League、ゲール連盟といったアイルランドの民族主義的団体が、19世紀の後半に続々と誕生するという状況が生まれてまいります。

そして、1914年に第一次世界大戦がはじまりますが、イギリスがドイツとの戦いで繁忙をきわめているそのさなかの1916年に、Easter Rising、復活祭の蜂起、という反乱がアイルランドで起こります。この時の反乱の指導者だったパトリック・ピアス(Patrick Pearse) (この Partrick というのは、さっき言いましたようにアイリッシュではポーリック Pádraic となります) を指導者とするナショナリストたちが、IRAとか、労働運動家のジェイムズ・コノリー(James Connolly)が作り上げた労働者を中核とするアイルランド市民軍 Irish Citizens Army、これらを率いて反乱を起こしたわけです。そしてダブリンの町のちょうど真ん中くらいにある General Post Office、中央郵便局ですね、その GPOを占拠して、ここに立て籠もり、それからアイルランド各地で一斉に警察署だとかイギリス軍の駐屯地を襲ういった形で反乱を起こします。このイースター蜂起は、1週間続くんですね。装備から言えば、本当に比べものにならない貧弱なものでもって、火力で比べるとおそらく10分の1か、もっと小さい武器を持って、近代的なイギリス帝国陸軍に抵抗したわけです。約1週間頑張るんですが、結局抵抗も虚しく失敗に終わります、そして首謀者たちは全員捕まるんです。その時までは、アイルランドの一般大衆は、そんなに高い民族意識を持っていたわけではないんですが、実はこの首謀者たちが捕まって、しかも、ろくに裁判を受けることもなく、一方的に処刑されてしまったことで、一夜にして世論が変わってしまいます。これは、この間、マイケル・コリンズ(Michael Collins)という映画がきました。ご覧になった方もいらっしゃるかと思いますが、こうしたイギリス側の一方的なやりかたが、アイルランドの世論を強く刺激したわけです。反乱自体は失敗

したけれども、反乱を指導した人たちの意図は、自分達が死ぬことによって達成されたということにあります。そのときの、イースター蜂起の指導者達の中の、処刑を免れた生き残りがつくったのが実は、Fine Gaelであり、Fianna Fáilなんですね。今は保守党になってしまっているんですが、これがその政党としての出発点なんです。残念なことに時間がないので、その辺はもう少し詳しく言わないといけないんですが、はしょります。ただ、イースター・ライジングがあったところに、実はイギリスの中でも、もうアイルランド問題は面倒だし、彼らに自治を与えてもいいんじゃないかという意見が強まって、自治法案がほとんど成立しかかっていたんですね。それが、第一次世界大戦が勃発することによって凍結された。パトリック・ピアース(Patrick Pearse)なんかは、そのことはよく知っていたはずですが、イギリスが第一次世界大戦で必死に戦っているときに、イギリスに痛撃を加える必要があるということによって起こした事件であったわけです。

それで、第一次世界大戦が終わりまして、その後で選挙がありました。その時の選挙で、シン・フェイン党(われら自身の党という意)、これが圧勝するんです。なぜ圧勝したかという、さっきいきましたように、イースター・ライジングで、裁判もなしに処刑されてしまった人たち—彼らはシン・フェイン党员でした—に対するアイルランド人の同情が非常に大きかったからだろうと思います。このころはまだ、アイルランドで選出された議員も、ウェストミンスター議会(ロンドン)に行くことになっていたんですが、彼らシン・フェイン党所属議員はウェストミンスターから一斉に引き上げてきて、ダブリンにアイルランド独自の議会、ドール・エレン(Dáil Eireann)を創設してその第一回会議を開いた。そこで議長に選ばれたのが、デ・ヴァレラ(de Valera)という人なんです。彼は反乱に加わっていたのですが母親がアメリカ人で、彼もアメリカ国籍をもっていたために処刑を免れたのです。イギリスはアイルランド議会を認めようとせずシン・フェイン党を潰そうという行動に出たために、第一次大戦が終わった後、1919年から21年まで、英愛戦争といっていますが、Anglo-Irish War が戦われたわけです。アイルランド側は、



シン・フェイン党を中核とするアイルランド政府です。イギリス側は認めていないけれども、アイルランドは、自分達はもう独立したんだということで、イギリスに対して武力で抵抗しました。イギリス側からいえば、単なる反乱だから、これを討伐するという方針だったんですが、アイルランド側はこれに対して武力闘争するという立場でした。で、そのときに、活躍したのがマイケル・コリンズ(Michael Collins)。マイケル・コリンズは、今でもアイルランドでは国民的英雄、アイドル的存在です。若くて軍事的天才といわれた彼は、のちに内戦中かつての同志と戦わざるを得ない波目になり、31歳で戦死するんですが、ハンサムでなかなか背が高く、すばらしいギリシャ彫刻のような感じの男でした。そのマイケル・コリンズが、イギリス軍を相手に戦った時に採用した戦い方が近代ゲリラ戦の嚆矢だった。これが、実際にそれから後に世界各地の解放戦争において、ホー・チ・ミンや、チェ・ゲバラや、毛沢東らが採用したゲリラ戦の原型です。そういうゲリラ戦という戦い方の創始者、それがマイケル・コリンズだったんですね。結局、1921年まで2年間この戦争が続くわけです。それで、ほとんどイギリスは手を焼きました。どうしようもない。とにかく待ち伏せして、イギリス軍がそこを通りかかるとワッと襲いかかるわけですからね、それから夜陰にまぎれて兵舎や武器庫や警察を襲うという、そういう戦法です。正規軍同士の戦いだったら、アイルランド軍は負けるに決まっているから、ゲリラ戦というやり方を編み出し、さんざんイギリス軍を悩ましたわけです。それで、とうとうイギリスは音をあげて休戦を呼びかける。まあ、これはイギリスだけでなく、アメリカなんかの世論の力もありました。大英帝国ともあろうものが、小さなアイルランドを力で押し潰そうとしているのはけしからんというふうな、そういう国際的世論があったわけです。

そこでイギリスとしては、この辺で、一応手を打ちたいからということで、アイルランドの代表をロンドンに呼んで、交渉が始まったわけです。ところが、交渉によってまとまった案がアイルランド分割でした。アイルランドには32県(32州といってもいいですが、)あって、そのうちの26県は圧倒的にカト

リックが多い所です。残り6県が、いわゆるアルスター地方と呼ばれている北アイルランドなんですね。イギリスが提示した解決案というのは、プロテスタントが圧倒的に多い北アイルランドは、住民の意思がイギリスに残りたいということであるから、これを切り離してイギリスに残し、カトリックが多数を占めている26県のみを認めようというものでした。つまり、アイルランドを分割して、26県だけを自由国(Free State)にしたわけです。そして名称もアイルとかエール(Eire)とかいって、アイルランドは一応1922年に独立したんですね。とにかく、そういう英愛条約(Anglo-Irish Treaty)ができました。ところが、その条約をめぐる、アイルランドの中で、この条約はのむべきだという派と、アイルランドを分割するものだから絶対にのむべきでない、あくまでも徹底抗戦して、32県全部が一緒になったときにはじめてアイルランドは独立が達成されたといえるのだという強硬派とに分かれたわけです。マイケル・コリンズは、実際に条約の交渉に当たった当事者でこれ以上イギリスを譲歩させることはできないことをよく知っていましたから、「われわれは、これによって自由を達成するための自由(Freedom to achieve freedom)を得ることができるんだ」と主張したんですが、デ・ヴァレラは、コリンズの人氣が非常に高くなっていたため、それに対する妬みもあってか、コリンズに反対します。いずれにしても、条約派と、反条約派、徹底抗戦派ですね、この2つに分かれてアイルランドで内戦が起こるんです。非常に不幸なことに、2年ばかり続いたこの内戦のさなかに、国民的英雄であったマイケル・コリンズは謎の戦死を遂げてしまう。それから、アイルランドの独立に尽力したアーサー・グリフィス(Arthur Griffith)などのアイルランドの独立に非常に功績のあった多くの人たちも死んでしまったのです。その内戦も2年位でようやく終息するんですが、徹底抗戦派の流れをくむのが、Fianna Fáilという、共和党ですね。そして条約派、つまり、この際はこれ以上は無理だ、オール・オア・ナッシングじゃなくて、ナッシングよりはサムシングをわれわれは選ぶべきだといったマイケル・コリンズを支持した人々が、Fine Gael、統一アイルランド党をつくったわけで、この二党が今日の

アイルランド政界を形成している二大勢力であります。時間がないので、いろいろもっと面白い解説をしたいところですが、今日はこのくらいで終わらせていただきます。ありがとうございました。

(注)

IRAは本講演が行われた3日後の7月19日、次のような停戦声明を発表した。「アイルランド共和軍はわが国の分裂と紛争の根本原因であるアイルランドにおけるイギリスの支配を終わらせることを誓っているが、永遠の平和を希求するが故に、真の包括的交渉を通じて民主的平和解決を探る機会を高める用意がある。

IRA指導部は現在の政治情勢を考慮した結果、1997年7月20日正午より軍事行動の完全停止を行うことを決定、全IRA部隊に1994年8月に実施した停戦の復活を命令した。」

IRAは3年前の8月にも全面停戦を発表したが、17ヶ月後の1996年2月、イギリス政府が交渉の前提としてIRAの武装解除を求めて譲らなかったため、イギリス政府やユニオニスト側に交渉を成功に導くための誠意が認められないとして停戦を破棄、テロ活動を再開していた。しかし今年5月のイギリス総選挙で労働党が勝って、ブレア政権が発足し、アイルランドでも6月の選挙で政権交代が起り、IRAに好意的な共和党内閣が誕生したことから、政治情勢がIRAにとって有利に展開しつつあると判断、またテロに対して厳しさを増している国際世論も考慮して、今回の停戦復活を決定したものと思われる。

(本学法学部教授)